

浄土 第62巻 4号(毎月1回1日発行)平成8年4月1日発行 昭和10年5月20日第3種郵便物認可

浄土

monthly
jODO
1996・4



1996 4 April

法然上人鑽仰会・発行



咲いたら、幸せ。

楽しい、嬉しい。

ちょっと切ない、なつかしい。

いろんな話をしたり、聞いたり。

そんな何気ないことが、人と人との

固い絆の第一歩。

それぞれの人の、それぞれのお話に

花を咲かせるお手伝い。

安い市外電話の、0088です。

日本を楽しくする電話

0088

お問い合わせ・お申し込みは、日本テレコムお客様センターまでお気軽に。



0088-82 (無料)

または 0120-0088-82

●受付時間 9:00～23:00 (年中無休)

浄土宗の名刹を訪ねる

新連載

第一回

極楽山 西方寺

撮影 小堀祐一



朝焼けに浮かぶ定義如来西方寺五重塔。

如来さまへの祈禱の願いはさまざまだ。



現在の本堂は六角堂で、堂内もそれほど広くはない。

極楽山 西方寺



本堂で祈禱は行われる。手前が大江田博導住職。



山門には仁王像が。右に鐘楼、正面奥が本堂。



お札所には色々なお守りなどが並ぶ。

本堂の回りの杉や松の太木は貞徳従臣の墓標といわれる。



長命の水は本堂奥の青竹林の地下を流れ湧き出る水だ。

天皇塚、連理の樺（けやき）は縁結びの神木。



広々とした浄土庭園に並ぶ茶室。



茶室の手前には茶席もある。



平貞能の位牌は本堂に安置されている。



新本堂は屋根に包まれ、平成十年に向け工事は進む。



浄土



1996/4月号 目次

カラーグラビア 新連載〈浄土宗の名刹をたずねて〉…撮影 小堀祐二	3
時光遷流轉	牧田諦亮 8
父の遺言忘れがたく	宮林昭彦 14
浄土宗の名刹を訪ねて 極楽山西方寺	真山 剛 20
表紙は語る 野草・花ごよみ	石井敏之 29
念仏に声するところに人々はそだっていった	石丸晶子 33
念仏の数遍について	宮澤正順 36
魅せられて映画に	丸林久信 44
コラム	53
外国で生活して	内藤みち 54
コラム	60
J フォーラム	61
事務局便り	68
編集後記	70

表紙題字＝浄土門主 中村康隆祝下

表紙撮影＝石井敏之

アートディレクション＝近藤十四郎

時光遷流轉

—— ときのながれ ——

時光遷流轉（ときうつりてゐてんす）とは、善導大師の後夜礼讃の無常偈の一節。ときのうつりかわりがはげしくて、無常は一刻とせまり、いつも死王とともにいるようなものだ、だから行者に勤めて、つとめて無餘むねんの境地にいたるよう、はげむべしとおしえてある。

京都大学元教授
滋賀・念仏寺住職
法然上人鑽仰会会長

牧田諦亮

仏縁純一、私は昭和二十五年一月に、滋賀県野洲町大御篠原のイイミに住職して爾來四十六年が過ぎた。わずかに四十軒の檀家であることは、私が中国仏教史の研究に専念することが可能であつたことを意味するものでもある。また過去四十六年間に檀家数において結局一軒の増減もないことは、この部落がJR野洲駅から四キロも離れていて、人口増につながらないことを示していると言えよう。旧來の檀家制度はきちんと守られていて、都会地では「家の宗教よりも個人の宗教を」と言われていても、事実、この地では「家の宗教」こそが重きを持つ所以でもある。

毎月、汁講、尼講という行事が輪番で催される。汁講が大体六十歳以上の、会社でいえば定年退職組、農家でも家督を長男たちに譲つた人が、交替で朝十時ごろから勤行・法話・食事、午後二時ごろには散会。尼講はやはり六十歳以上で旦那さんが家督を譲つた人の奥さんが入会の有資格者。汁講の名は昼食は一汁一菜というところからきたものである。尼講は午後二時ごろから集つて夜七時・八時ごろに、勤行・法話・食事のすべてが終る。汁講は総勢十二、三人。尼講は二十四名にもなる。男女の平均年齢の隔差ははつきり示している。

勤行のあとの法話は、主として法然上人の御法語を中心とすることが多い。数多い法然上人の御法語の中でも、とくに登山状とざんじょうには、私の心をうつ一節がある。

「あるいは金谷の花をもてあそびて、遅々たる春の日をむなしく暮し、あるいは南樓に月をあざけりて漫々たる秋の夜をいたづらにあかす。あるいは千里の雲にはせて、山のかせぎを取りて歳をおくり、あるいは萬里の波に浮びて、うみのいろくづを取りて日をかさね、あるいは嚴寒にこほりをしのぎて世路をわたり、あるいは炎天に汗をのこいて利養を求め、あるいは妻子眷族にまことわかれて恩愛のきづなきりがたし。あるいは離敵怨類にあって曠患のほむら止むことなし。総じてかくのごとくして、昼夜朝暮行住坐臥、時としてやむことなし。ただはしきままにあくまで三途八難の業をかさぬ。しかればある文には一人一日の中に八億四千の念あり、念々の中の所作みなこれ三途の業なりといえり。かくのごと

くして昨日もいたずらにくれぬ。今日もまたむなしくあけぬ。いまいくたびか暮し、いくたびかあかさんとする。」

この法然上人の「登山状」は、上人の念仏往生の提唱が比叡山・興福寺などの既成教団に少なからず影響を与え、かれらの専修念仏に対する弾圧をやわらげようとする意図のもとに書かれたものとされる。私はそのことよりも、書かれている人間の生きざまについての法然上人の深い洞察に頭がさがる。

もう八年近くなるが、名古屋中区にある新義真言宗智山派の七寺にある平安末期書写になる一切経の調査を華頂短期大学教授の落合俊典氏らとすることになった。先ず大般若経卷十の奥書に「承安五年卯月五日 書写畢々」とあるのに気づく。高倉天皇承安五年は西暦一一七五年、法然上人がこの春、専修念仏の法門を唱えられた年である。この七寺には承安五年から初められて、数年で一切経書写の大業を果して、現存四九五四巻もの書写經典が永年の風雪にたえ、戦火にも逃れて、歴代の住職や多くの仏教徒の庇護によって、書写當時に作られた経唐櫃の中に安置、国の重要文化財に指定されて今日にいたっている。今から実に八百二十一年の昔、法然上人が四十三歳の時に、尾張、京都などで書写された經典を目のあたりにして、その時代をいまさらのように思いうかべる。

血縁を持つ親鸞聖人とはことなつて、法然上人は専修念仏に対する既成教団の反発をまともに受けられ、滅後十数年たつても、東山から西山へと遺骸を遷さざるを得なかったほどであるから、上人の書跡などの残されるものはほとんどなく、元祖大師と讃えつつも、雲の上の存在のように思われてきたが、その法然上人浄土開宗の年から数年の間に書写され今日に伝えられた数千巻の一切経を拜して、法然上人をこく身近に感ずるようになったと言つては過言であらうか。

このころ、平家はすでに全盛期を過ぎ、後白河上皇と清盛との対立も顕著となつていたのである。高倉天皇は後白河上皇の第四子、しかも清盛の娘徳子（建礼）中宮とした間柄

ではある

匡都の鹿ヶ谷の山荘における平家討伐の「鹿ヶ谷の謀議」があつたのは治承元年（一一七七）であり、その二年後には、両者の対立を氣にやんで讓位されるという事態をまねき、さらに二年後の養和元年（一一八一）正月には崩御されるという悲運にあつた。

それから四年後、元暦二年（一一八五）三月には平家は壇の浦に敗れ、清盛の妻時子は我が孫にあたる安徳天皇を抱いて西海の藻屑と果てた。建礼門院も海に投じたが救われて、京都に送還されたが、東山の長樂寺で出家し、後は高倉天皇、わが子安徳天皇の菩提を弔う日々を送り、法然上人往生の翌年建保元年（一二三三）十二月二十五歳で亡くなったという。

このような激しい変化の中で庶民の生活は、月をあざける人々、花をもてあそんで日を送る人々、このような満ち足りた人もあれば、山のかせぎに生涯を送る人、海に出て魚をとる人など、その日その日の生活に追われる人々。こればかりは、ただスケールが大きくなつて、魚を捕るにもアフリカ沿岸に出稼ぎに行きはするが、今も昔も変らぬことである。

御法語のように、朝起きてから晩寝るまで、いろいろな念が頭の中を駆けめぐる。それを八億四千（万）の念ありというのは、法然上人夢中の師、中国の善導大師のお師匠さまにあたる道綽禪師の『安樂集』巻下に、淨度菩薩經に見える言葉として引用されている。淨度菩薩經は翻訳經典ではなく、中国人の撰述した經典（疑經）として知られるもので、私たちの「七寺古逸經典研究叢書」第二巻として、淨度三昧經を中心としてこの三月末には刊行されるものである。

動物園の猿が島にいる猿のように、少しもおちつきがなく、たえずキョロキョロして眼をグルグル廻すありさまは、猿だけのことでなく、人間の心もまたたえず動きまわつておちつくところがないようなものとされるのである。それらのすべてが（地獄、餓鬼、畜生）の三途、（それをふくめて、仏を見ず、法を聞くことのできない）八難の業因をつくりつづける私たちの日々の所業。これもまた法然上人の時代も、まさに二十一世紀を迎えようとする今日の時代も、あまり大したことないが、あるいはもっとと大きな三途八難の難悪のこと

を重ねている私たちである。日常生活への深刻な反省が要求されるのである。

人間は生きてゆくためには職業^{なりわい}をもつのは当然のことであり、その職業は人によって千差万別であることも、法然上人当時と今日と、何のへだたりもない。私自身、八歳になって仏門に入り、少学・中学・専門学校・大学と勉強させて頂き、学業が終ってから上海に赴任したのも、時の流れの中の一であつた。

敗戦後、現地召集解除で三日目に上海の東亜同文書院大学に戻つたが、大学は終戦とともに閉鎖され、一ヶ月後の九月二十日には早くも、国民政府教育部京滬特派員弁公所（文部省の南京上海地区特派員事務所）の図書部門の代表として鄭振鐸氏が図書館の接収をはじめた。私たちの目の前で、多くの労働者によって書棚の本が無造作に麻袋（マアタイ、お米を入れる袋）にどんどん詰めこまれていった。その総計は二五五〇八四冊と計えられている。

（東亜同文書院大学史）

この中には、教員個人の蔵書もはいつていて、私も約三〇〇〇冊の蔵書を失つた。

しかし、世の中不思議なこともあるので、私の本の一部を所有している方が四十年たつて判明した。現在、明治大学文学部教授（東洋史）の氣賀澤保規氏が富山大学助教のころ、西安の陝西師範大学に一年ほど研習していたが、その指導教授である同大学古籍整理研究所長の黄永年教授がある日一冊の本を持ってきて、「この蔵書印の人を知らないか」と尋ねられ、みれば「牧田蔵書」とあり、この人なら仏教大学助教時代によく顔を合わせたから知っていると思つたことを、氣賀澤教授が私に報告してくれた。昭和六十三年秋に、善光寺大本願鷹司誓玉師一行の西安・敦煌・ウルムチ・トルファン視察団に加わつて中国に赴いたとき、九月三日西安の唐城飯店という新築早々の近代的なホテルのロビーで、氣賀澤教授の仲介で、黄永年教授に面会して、その由来を聞いたのである。黄教授が上海の復旦大学の学生であつたころ、古書店で買いたつたというこの本は、上海の開明書店刊行の『二十五史補編』一部、とある。なぜこの本のことを言うかといえば、先の接し方、鄭振鐸（一八

九七（一九五八）には、岩波新書一七二、昭和二十九年七月二十日刊で『書物を焼くの記』があり、安藤大郎（早大）、斎藤秋男（専修大）両氏の訳に成るものがあ（原題は抗日戦中、上海の租界で不自由な生活を強いられながらの日々を、一九四五年勝利直後、上海で発行された週刊評論雑誌『週報』に「塾居散記」として連載したものである。一九四一年、上海の日本軍が租界に侵入しようとするのにそなえて、抗日と名のついた本を焼きつくしたそのことを書いた「書物を焼くの記」を題名としたのである。その最後に「ただこのような書物の災厄はもう二度とないように祈りたい」と結んでいる。

その鄭振鐸氏が立場を変えて、接收官として東亜同文書院大学の図書館で蔵書を取りあげる役目を担うこととなったのである。抗戦勝利から一ヶ月ほど、非常に昂揚した空気の中で、勝利者の誇りをあらわにした鄭振鐸氏の顔は、図書引渡しの手務処理に立ち会った私には今もなまなましく記憶がよみがえる。

考えてみれば、戦後の混乱の最中になくした本が四十余年をたって、その所有者がわかるという現実、「書物の災厄は二度とないように祈りたい」という人が遂に接收の役をする。個人の蔵書もすべて徴しあげる役をするとは、鄭氏も多少感ずるところがあったかも知れない。（これからまもなく、国民党から共産党に乗り換えた鄭氏は、後に北京の中央政府文化部文物局長となり中国科学院考古研究所長を兼ねたが、一九五八年十月十七日アフガニスタン・アラブ連合国訪問の途中、航空機事故で死亡した。北京の八宝山革命公墓にその墓塔がある。）

このようなことも、今となつては、人の世のとるに足らぬ日常茶飯事であるかも知れない。「ゆく川の流れば絶えずして、しかもとの水にあらず、よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし」と記した鴨の長明は、建曆二年弥生の晦日ごろ、この『方丈記』をしるしたと認めている。法然上人誕生のすぐあとのことである。

父の遺言 忘れがたく

大正大学教授
横浜・大光院住職

宮林昭彦



一、

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらわす。おこれる者は久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。たけき人もついに亡びぬ、ひとえに風の前の塵におなじ。

これはいうまでもなく、「平家物語」の巻頭をかざる名文句であるが、実は子供心にも、父がよく口ずさんでいたことを鮮烈な印象をもって思い出すのである。「おこれる者久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。たけき人もついに亡びぬ……、しかし人間はかならず永遠のいのちのなかに還ることができ。かならず……」自分に言い聞かせるように、くりかえして呟いていた。父は大学卒業後まもなく、現役兵として戦争に出征し、三度戦場に赴き、四度目最後の応召で、ついに昭和二十年七月十日、フィリッピン、ミンダナオ島カガヤンで戦死するのであるが、その出発の

数日前のことであった。

父は僧職にあったが、学校の教師をしながら、夢は将来布教師になることであつた。あの戦時体制のなかで、教師をしながら寺を渡り家族の生活を支え、二、三年しては戦地へ出向きそしてまた除隊するといった状態であつた。寺に住しているときには、寸暇を惜しんで法然上人の伝記を研究しながら、声を出して読み、語っているうしろ姿をよく見たものである。ときどき家族を集めて、ぼろぼろの『勅修御伝』を繕きながら説教の練習をくりかえしている姿が今も彷彿と浮んでくる。

「祇園精舎というのは、お釈迦さまのためにスダッタ長者が寄附をして建てたお寺で、スダッタ長者とは、給孤独といって孤独な人びとに食を給したという意味である。スダッタは孤独で貧しい人びとにほどこしをして救済につとめたが、その心はお釈迦さまによって教えられ救われた。そのため祇園精舎を寄進して、のちのちお釈迦様は、ここで数多く

の説法をなさるのである。」このような趣旨のことを語っていた。

父は戦地では最前線であつたが、時折り本部付きで、戦死した兵隊の葬儀の導師をしていた様子である。目の前で戦死をしていく戦友の痛ましきやうに、無念さを訴えながら息絶えていく姿にさいなまされて、いくたびか野辺の送りをしたことだろう。

父の信条として、仏縁があつて出家し僧侶になつた以上、法然上人のみ教に導かれて、随法の生活をしなければならぬと確信し、軍人らしく厳格な生活姿勢を貫いていた。四苦八苦の人生のなかで、愛別離苦の悲しみと、生老病死の今生の別れの苦悩と悲嘆をどう克服するか、二十代から戦場をかけ巡つてゐると、思い悩むことしばしばであつたようである。

二、

時国ふかく疵をこうぶりて死門にのぞむとき、九歳の小児にむかいていわく。なん

じ敵人をうらむことなけれ、これ偏えに先世の宿業なり、もし遺恨をむすばば、そのあだ世々につきがたかるべし。はやく俗をのがれて家を出て、わが菩提をとむらい、みづからの解脱を求めんには、といいて端坐して西にむかい、合掌して仏を念じ眠るがごとくして息絶えにけり。

法然上人の伝記には出家についての様子が、縷々述べられているが、父の『勅伝』のこのペーじは、紙の色がかわり、すり切れていた。法然上人のお誕生は、ちやうど源頼朝が鎌倉に幕府を開いたときより、六十年前にあたると長承二年（一一三三）四月七日のことである。

この時代はまさに激動の時代のさなかであつた。王朝文化のゆきづまりに悩む貴族と、そのゆきづまりを打ち破つて新鮮な気魄にみちた社会を建設しようと意気こむ武士、庶民階級とが、真正面からぶつかり合い、その地

位を転倒しようとした時代であった。政治は乱れ、道義は地におち、そのためにকাশし出される社会的不安は、相つゞ兵乱と天災のなかにあえぐ人びとの胸底深くおおい、現世をのろう来世的なおもいを一層濃くしたのである。

こうした昏迷した時代のさなか、法然上人は現在の岡山県久米郡南町にお生まれになり、幼名は勢至丸といった。そこには現在上人のゆかりの地として誕生寺というお寺があるが、当時は、美作国久米南条稲岡の庄といった。

父は漆間時国といい、押領使であり、その地に住む豪族の一人であった。横領使というのは警備司令官の役柄である。母はやはりその地方の名門秦氏の出身であつて、仏教に帰依し信仰深いかたであつた。このように、上人は地方豪族―武士の家に生まれ、独り子としてあたたかい両親の愛情を一心にあつめて育てられたのである。

ところが、九歳のとき思いもかけない悲劇

がおこつた。稲岡の庄の預所であつた明石源内定明は、以前から上人の父の漆間時国とは不和の間柄で、平生より怨み合うなかであつたが、ついに保延七年（一一四二）春の頃、不意に時国の館に夜討ちをかけた。父の時国は、その夜うけた疵が致命傷となつてしまい、疵は重くして死に瀕したとき、枕辺に幼い勢至丸を呼んで、仇討をいましめられたのである。

その当時は、仇討をすることこそが、武士の本懐であるといわれた時代である。定明が夜襲のおり、難を避けて庭にかくれ物かげから窺つていた九歳の勢至丸が、定明に対して弓矢をとつて射たので、矢が眉間を疵つけたので、これを小矢兒と讃えたと伝記にはつたえるように、その時代は、まさに報復し仇を討つことが尊重されたのである。

このような時代に、「もし敵に怨みをもつてあだを打ちかえせば、永久に斗争はたえない」という父の遺言は、幼い勢至丸の心に強

烈にうつったことであろう。的に対する復讐でなく、かえって復讐を断念することですすめたのである。父時国みずからが、争いがくり返される現実に対して、それを妄縁と教える仏教の深い思想を身につけていたからであろう。

三

亡父の遺言、耳の底にとどまりて、心のうちにわすれず。はやく四明にのぼりて、すみやかに一乗をまなぶべし。ただし母世にいまさん程は、晨昏の礼をいたし、水菽の孝をつとむべしといえども、有為をいとい無為にいるは、真実の報恩なりといえり。

父は『勅伝』を手にしなから、この言葉を痛く心に刻んだことであろう。あの戦時体制の時代のさなか師匠からは「お国のためにご奉公するように」といわれ、歓呼の声に送られて戦場で敵軍を殺し、いくたの生死を彷徨いながら、いいしれないむなしさと、悔恨の

情にひたつたにちがいない。

戦争の悲惨さを身にしみているだけに、平和への願いを込めれば込めるほど、戦争のおろかしさを感じたようである。戦争の大義名分は、民衆の安寧と平和な世界を出現するためであるが、現実には人間同士が討ち合い、殺し合いのなかに平和を築いている。一人の人間を殺せば殺人罪に問われるが、戦争で何万人を殺しても殺人どころか、英雄として讃えられるという矛盾をどうとらえたらよいか。たぶんその当時戦争にかり出された多くの若人たちは、戦いながら苦悩にみちた二律背反的な気持ちで青春を過ごしたことだろう。

法然上人が、「父の遺言が耳底に留まり比叡の山に登り出家の道を求めつつも、悲嘆の母を思うと朝夕粗末な水と豆の粥でもささげて孝養を尽さねばならない。しかしながら迷いの矛盾にみちた世間を厭つて出家の道に入り、やがて仏の悟りの境地にいれることが、真実の報恩の道である」として、母親を慰めたが、

母は道理を尽した言葉ではわかつて悲しみの涙は袖でかくしようもなく、別離の悲嘆におののき心は千々に乱れて惑う姿が『勅伝』には切々とつづられている。

かたみとて、はかなき親のとどめてし

この別れさえ、またいかにせん

この歌は非業の最後をとげた夫が、ただ一粒種として残した形見の子供と別れる母親の気持ち詠んだものである。父はこの歌をよく口にして母のこころを語っていた。

思えば人間の勇氣には二通りある。がむしやらに進むのも勇氣であるが、しかし退くのもまた勇氣である。むしろこの場合の方が勇氣がある。法然上人の出家は単に現実社会からの逃避ではない。法然上人の信仰の世界は「父の遺言忘れがたく」争いを越えた永遠の平和の実現であった。

戦争の悲劇は、第二次大戦が終結してはや五十年たつたいまでも、戦火のなかに家族が散り散りになり住家を失い飢えに苦しみ悲惨

がつづいている。国際連合ができ、ユネスコ憲章のなかに「戦争は人間の心の中から起ってくるものであるから、まず人間の心の中の戦争が起きないように、それを防止するため……」という有名な言葉がある。このユネスコ憲章の意味するものは、文化と教育と科学とを通じて、其の人類の平和を打ちたてようとするものであった。しかし世界はその後五十年の間いまだに戦争がつづいている。

わが国が原爆唯一の被爆国として、平和へのアッピールをどう果すか、いま問われているときである。平和を叫びながら平和的手段でなく、原爆や武力保持によって平和が保たれているのは、まことに危険な平和ではなからうか。

平和は人類の悲願であるが、悲願を達成のための知恵は、法然上人によつてはじめて導かれ開かれるものである。

新連載

浄土宗の名刹を訪ねる

真山剛

【第一回】
極楽山西方寺





大学卒業とともに長い間如来さまを守り続けて来た大江田博博住職。成城大学経済学部から大正大学という経歴を持つ異色住職。

「一生に一度だけ願いをきいてくれる、ほんとうに、ほんとうにありがたいホトケさんですよ、定義如来さんは」

仙台の駅からホテルに向かうタクシーの中で、地元出身の運転手さんは、まるで願い事をきいてくれたホトケさんの前に佇み、手を合わせているかのように、静かにそしてゆっくりこう言った。

その感謝の気持ちがこちらにも十分伝わり、二の句が継げずにいると、運転手さんはガラリ口調を変えて続けた。

「お客さんは東京からだスベ」

新幹線の到着時間は熟知しているし、身なりや言葉遣いでどこから来たのか、わかってしまうらしい。

「定義さんはこっちで知らない人はいないホトケさんで、みんなの願いをきいてくれるありがたい如来さんなんですよ」

定義如来は庶民信仰の祈禱寺極楽山西方寺の本尊で、千七百六年の開創から信仰を集め、いまでは東北地方一帯の人々の心の拠りどころとなっている、と聞いて来たのだ。

翌朝、まだ暗いうちに昨日と同じタクシーに乗り込んだ。バスもあるが、定義如来まで小一時間の間、もう一度昨日の運転手さんの話を聞きたくて予約させてもらったのだ。

乗り込むとすぐに、なぜこんなにも深い信仰の対象になったのか



定義三角あぶらあげは温度の違う油で二度あげる。揚げたてあぶらあげが食べられる。一枚百円。

を聞いてみた。

「もともとは閑上（ゆるあげ）（仙台市の南、名取市にある古くからの漁港）

の漁師が網が破れて困り果て、この定義に願をかけたところ、それ以来網が破れることもなく漁に出るたびに大漁になった。

定義さんのおかげと、漁師が破格のお礼をしたらしい。その噂が弘まって参拝客がものすごく増えた、っていう話だね」

この運転手さん、本当に詳しい。そこで尋ねてみると、奥さんの病気が定義さんのおかげで治り、それ以来定義さんのご開帳や行事には欠かさず参拝しているのだそうだ。

話題が定義さんの名所の話になった。

本尊定義如来の掛け軸を安置する六角形の本堂、縁結びの神木とされる安徳天皇塚連理のケヤキ、長命水、茶席に茶室、子育観音、定義如来の縁起絵巻などが並ぶ展示室「定義玉手箱」、浄土庭園……、運転手さんはまるで西方寺専属のガイドのようだ。

なかでも昭和六十一年秋に落慶した定義如来西方寺五重塔は、西方寺の名所中の名所で、西方寺開祖とも言うべき平貞能公（ひらさねこう）（のち定義と改名）の菩提を弔い、未来永劫（えいこく）の平和を祈念する塔で、高さ二十九メートル。塔身は総青森ヒバ白木造。屋根も青森ヒバこけら葺きで室町様式の塔だという。これはすごい。そう宮城県初の五重塔

『定義玉手箱』には定義如来縁起絵巻などが展示されている。



中国伝来の二霊像 定義如来縁起

定義如来の縁起は遠く中国に遡る。唐の時代の禅僧が文殊菩薩から賜った南無阿弥陀仏の名号と、阿弥陀如来画像宝軸のうちの、宝軸が西方寺の本尊であると伝えられている。平氏隆盛の世に、平重盛公は乱世を平和に立ち還らせんと、中国の先の禅僧の師弟の寺に祈願のためにいくばくかの黄金を寄附したところ、その篤志に感じ、寺の宝物、つまり文殊菩薩からの二霊像(宝軸)が贈られた。

この宝軸を重盛公の重臣、肥後守平貞能(たいらのさだよし)が源氏の厳しい平家追討を、出家したり名を変えたりしつつも、肌身離さず、ともども逃れた。そして最後に落ち延びたのがこの東北の山中、宮城県宮城郡宮城町太倉(現・仙台市青葉区太倉)の地なのである。ここで貞能はなおも世をはばかって名を「定義」(さだよし)と改め、ここからこの地が定義となり、宝軸の阿弥陀如来を定義如来と呼ぶようになったのである。

であるうえに、東北では大正、昭和を唯一の純粹な和様の木造の塔、そして青森ヒバだけで作られた日本唯一の塔、とうなづける。この塔は西方寺第十九世、博隣上人、第二十世、博宗上人も発願していたものだが、ついに二十一世の博導住職の発願で代々の念願がかなったものである。さらに平成十年の完成を目ざし現在の本堂を踏襲した六角形の、これも青森ヒバの木造本堂も計画、現在建設中だ。

話に夢中になっているうちに街中を抜け山道に入る。

この山道の終点が定義如来だという。

つまりこの道を上る車は定義如来に向かう車で、この道を下る車は定義如来から帰る車。そう、終点の仙台市青葉区太倉字上下の町

本堂前でお線香を立てる参拝客。



は定義如来の奥の院なのである。

空が白み始めるころタクシーがいよいよ参道に入った。山門に近づくと、運転手さんが右手を向きながらこう言った。

「お客さん、帰りにこの豆腐屋のあぶらあげを食べていがいん」

西方寺の祈禱は平日が午前八時から午後二時半までに六回、日曜祝日は七時半からとなり、八回となる。

運転手さんの一生に一度だけという言葉を思い出し、八時からの祈禱に開運祈願をお願いした。

こじんまりした本堂に鐘が鳴り響く。

住職の厳かな読経に、こころ静かに聴き入る。次々と祈禱の内容と願主の名前が如来さまの前で読み上げられる。

三十分ぐらいだろうか、無事に願いが届けられた安堵感に満足して本堂を出る。そして、無理を承知で住職にお話を聞かせてもらいたい、とお願いした。

住職は快く時間を割いてくれた。

「年間約二十五万人の方が祈願され、約百万人の方が参拝されます。昔は千人講もあったといいますが、このころは多くても観光バス二、三台ぐらい。それでも講の数は定義講など色々あって、千以



定義名物 「三角あぶらあげ」

定義如来のある仙台市青葉区大倉は定義如来とともに息づく町だ。参道にある定義とうふ店も、旅館定義清水館から明治二十三年に豆腐作りを引き継ぎ、今も百年の伝統の味を守っている老舗である。多い時には一日に二万枚、平均しても一日に七千枚ぐらい売れるというから、如来さま顔負けの人気だ。手づくりとはいえ従業員十五人と、とても失礼だが田舎のとうふ屋とは思えない。

上になります。

とにかく、ここの如来さんの人気は根強く、宮城県沖地震で一本道が閉鎖されたときも、山を越えて参拝にきた方がいらっしやったのですが、これには驚きました」

まだ四十代半ばの若い住職だが、先代が亡くなられてからすでに二十年近く住職をされているという。

そこで少々、意地の悪いことを聞いてみたくなった。

というのも祈願や祈禱は真言宗などの密教系のもので、追善供養が主体の浄土宗には祈願や祈禱はなじまないものだ、と東京の菩提

この店でどうして……。

それもそのはずで定義とうふ店四代目の庄司勝壽さんが昭和五十五年、名古屋の名鉄デパートの宮城物産展に出品したところ、これが大人気。地元仙台よりも全国で有名になったという。知名度言えば定義如来さんより上の全国区だ。しかし、おやじさんは定義さんあつてこそと、毎月のお礼参りも欠かさない。ふつうの何倍もある厚いあぶらあげはとても味わい深い。定義のもうひとつの顔である。

山門を入ると立派な鐘樓がそびえる。



寺の住職に聞いてきたからである。

「実は私はお寺に育ったわけではない上に、僧侶の資格を取った四日後に先代が遷化（せんげ、亡くなること）しましたので、こうしたお寺の形態にあまり疑問も持つ余裕もなく住職になってしまいました。ですから、他の浄土宗寺院とは違うことにはつきり気づいたのは、住職を務めさせていただいて七、八年経ってからでした」

住職は何のてらいもなく静かに続けた。

「ですが、宗教の目的はひとつ、人々の平和です。確かにこのお寺の信仰形態は不思議なところもありますが、この如来さまのおかげで、それこそ数えられない人々が救われてきたのです。

大事なことはこうした伝統を絶やさず、靈驗あらたかな阿弥陀如来さまのこの地をしっかりと守ることだと信じています」

東北の人々にこれだけ信仰されているにもかかわらず、全国にその名が届かないのは、こうした住職の信念に基づく「寺にPRは必要ない」という考え方があった。

まさにこの山奥のお寺は、二百余件の檀家と地元の人々と共に生き、そしてこの如来さまに救いを求め続ける人々のために、数百年先を見据え木造の伽藍を建立し続けていくだけなのかもしれない。

ひとしきり話を聞かせていただいた後に、あぶらあげのことを聞



定義の名跡、西方寺五重塔は昭和六十一年十月に落慶した(写真は当時のもの)。

いてみた。するとその豆腐屋さんの息子さんもこのお寺に務めているという。本当に地元と密着しているのだ。それでは、と、ずうずうしくも息子さんにお店に連絡してもらい、定義名物を味あわせてもらうことにした。参道を下りると左手にあった。

昔のままの作り方をしっかり守り続けている大きく厚い三角のあぶらあげは、香ばしく、とてもおいしかった。いつもの癖だがお土産に買ってバスで仙台に向かうことにした。

ようやくすれ違うことができる細い道で何台もの車と出会った。この道は一本道、行く先は定義さん。

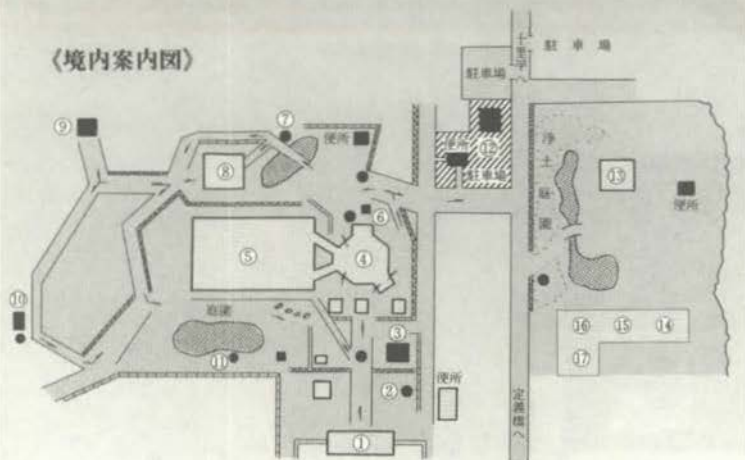
市内が近づくにつれ、定義の山々を借景にした伽藍が思い起こされてきた。本尊の阿弥陀如来を見にもう一度来よう、と思った。そして一生に一度だけ願いをきいてくれるという定義さんに、たぶんお礼をしに来ることになるな、とも思った。

またひとり、定義さんの信者がふえたのかもしれない。

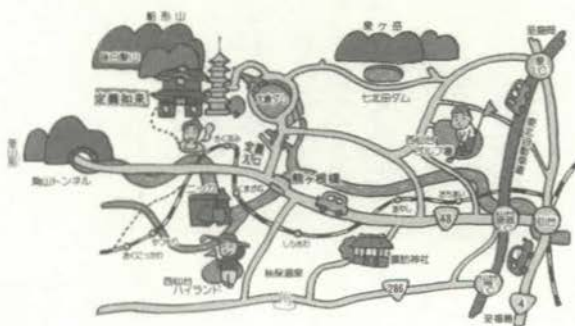
(ルポライター)

(注) 定義は正しくはじょうぎと読むが、地元では、じょうげ、と言う。

〈境内案内図〉



- | | | |
|-----------|----------|----------|
| ① 山門 | ⑦ 長命水 | ⑬ 五重塔 |
| ② 延命地藏 | ⑧ 天皇塚 | ⑭ 展示室 |
| ③ 鐘樓堂 | ⑨ 歴代住職の墓 | ⑮ やすらぎ |
| ④ 本堂 | ⑩ 熊野神社 | ⑯ 茶室 洗心亭 |
| ⑤ 庫裡(寺務所) | ⑪ 伊達家の梅 | ⑰ 茶室 翠光庵 |
| ⑥ 勝軍地藏 | ⑫ 子育て観音 | |



定義如来のご案内地図

- 交通／**車** 東北自動車道 仙台宮城I.C
山形方面 40分
- バス** 仙台駅より仙台市営バス定義行き
1時間20分 終点下車
- 777** 仙台駅西口より約1時間

表紙は語る

野草花ごよみ

4月

・

スマレ

(スマレ科)

山野の日当りのよい場所にはえる。他のスマレの仲間のように〜スマレと呼ばれず、単にスマレというように、スマレの代表格であり、花の色もまさしくすみれ色である。ただ、小生が外出した場合どういうわけか見かけることがめったになく、見かけてもよい写真が撮れないという植物である。

撮影場所 東京都青梅市



もうひと花

フッキソウ (ツゲ科)

富貴草。山の林床にはえる多年生草本。地下茎を横にのばし、そのところどころから茎を伸ばし、繁殖する。春、花を咲かせ、秋白い実をつける。日本庭園に植えられることもある。名の由来は牧野植物図鑑によれば、その繁殖力によるということ、他の本によれば常緑であることによるそうである。

撮影場所 東京都八王子市

表紙Photo/Report
石井敏之

念仏の声の
するところに、
人々は育っていった

特別寄稿

東京経済大学教授

石丸晶子

法然さまは阿弥陀の願力への絶対的信頼を貫かれ、あとに続く多くのお弟子や人々は、親鸞さまをはじめ、みんな法然さまへの信頼に生きて浄土への信仰の道を歩いていった。

ここで、私の体験を通して感じるお念仏の教えについて、思うところをしるしてもらいたい、という編集部の御要望にしたがい、私事にもなって大へん申し訳ないけれども、亡父の思い出をしるさせて頂きたいと思う。

父は明治も終りに近づいた頃、福岡県の旧家の一人息子に生まれた。大へん愛され、穏やかに育ったらしい。

戦時中、というからも随分昔のことだ。はじめて父の故郷を訪ねた私は、花咲き鳥歌うこの世の別天地ともいいたいその美しさに深く心打たれたことが思い出される。ハッと息を呑むほどの、平和でさわやかな美しさは、今も臉にあざやかである。

大へんきれいい好きで几帳面、そして温かく思いやり深かったその人となりは、あの美しい自然に囲まれたふるさとと、家庭の躰によ

るところが大きかったと思う。

浄土の信仰厚い家庭であった。父の祖母は初孫であった父の誕生をよろこび、その御加護を祈って、以来終生、村はずれのお地藏さまへのお参りを一日も欠かさなかった。

わたしが物ごろついた頃から、父は折にふれ、そのことを話しては、「父さんが今日あるのは、全くお前たちのひいばあちゃんのお蔭だ」といつて手を合わせた。

大正ロマンチズムの只中で学校教育を受けた父は、旧制中学時代、小説家にあこがれ、自分も作家を志したことがあった。

しかし、諸般の事情はそれを許さず、それなら芸術に尤も近い領域の仕事をとということで、数学が得意であったところから、建築学科に進学することになったという。

卒業後、父はその方面の会社に勤めることになった。後半生は経営陣に加わることになったけれども、今、その生涯をふり返ってみて、その本領はビジネスマンよりも文人にあ

ったとしみじみ思う。

父は実家人として有能であり、経済界の人々から高く評価され尊敬されていた。しかしその心の奥には常に少年の日の夢がうずき、企業戦士として超々多忙の日を送る中で、文の世界への郷愁を抱きつづけた人であった。

今、私の手許には、出張の旅先などから知友にあてた数行の短信が数多く残されているけれども、それらを読み返すにつけ、卒業以来八十歳で退職するまで、実業の只中で多忙をきわめた父は、実は本来いるべきでない場所て生き、実業の世界は父にとり、ほんとうは異邦の世界であつたのではないかと思われなければならない。

生涯、折にふれ、日々の感慨を短歌に託して詠んでいた。

いわし雲　またつらなりて　流れおり

美濃の大野に　秋の深けゆく

柿の木に　日々のぼりたる　思い出も

すでに遠かり　傘寿をむかゆ

退職の年の秋、最後の出張先で詠んだ歌である。

父はその魂の本領において文人でありながら、とかく文人につきまといがちないやらしさが全くなかった。臭味とかいやらしさとかとは、凡そ無縁の人であつた。

三つ子の魂百までという。この父は、心に文の世界への夢をしまいつづけていたと共に、また代々家に伝わる浄土の信仰を深く隠しもつていた人であつたと思う。

わたしの母は信仰心のない人であつた。そんな家庭に育ち、加えて代々嬭天下が当り前となつている家で成人した女性であつた。

家庭内のことを短い文面でするのは誤解のもとになつてはなはだ書きにくいけれども、わが家の「女王」となつて君臨して来たのはこの母で、父が故郷のことや先祖代々の信仰心のことを口にしても、実家が全てで最上である母は、せせら笑つて相手にもしなかつた。父に欠点があり誤ちがあつたとするならば、

この母が家庭の専制君主として君臨することを妨げなかったところにあると思う。わがままで偏狭、万事に居丈高な母に恐れをなし、会社の仕事に打ち込んで逃避しているうちに、家庭の中には誰ももう手がつけられなくなっていたのである。

だが一方、あの母を一体何びとが、うまくリードすることができたろうかと思う。こちらが何か言っても、それを強く激しくさへぎって、「聞く耳を持ちません」と、きつと相手を見据えて撥ねつける。私は物ごろついで以来、母が人と楽しそうに話し合う姿を一度も見ることがない。

「孤高」という言葉に、考えられない程愛着し、こだわる人であった。自分の子どもがその友だちと楽しく遊ぶことも嫌い、常に「孤高」のうちに、母一人との関わりの中で生きることが求めた。

「自分の母親の悪口をいう。一体どういうつもりか気が知れない」などとうかいわないで頂きたい。私は日頃、世にいう「母の愛」

というものは、一面の真理ではあっても、他方、神話伝説にしかすぎない場合があると思っているのだが、まず、人間の姿を、人間の現実を歪めず、美化せず、ありのままに見つめることにこそ、宗教者がその責務を果たしていく第一歩があるのではなからうか。

人間世界が、一切衆生救済の弥陀の心から遠くはなれて苦しんでいるのであれば、そこから目をそむけ綺麗ごとで片づけようとするのではなく、その苦しみを根源から受け止めるようと心してこそ、世界に阿弥陀の光はさしそめるのではないだろうか。

綺麗ごとでは、人は救われないのである。

自分の内側にこもり、人と交って切磋琢磨することなど、考えただけでプライドが許さない母は、年を重ねるごとにその性格をますます片よらせて行き、そんな家庭に絶望した父は、ますます仕事一途の生活に逃避して行った。その頃、母はすでに自分以外の他人の不幸をねがい、他人を苦しめてよろこぶ鬼ご

ころの人、悪意の人になっていて、荒廃という言葉をつかうならば、私の家庭は荒廃しきった家庭であつた。

八十歳を過ぎ、第一線を退いた父が、このあとその母が君臨する家で一体どう扱われ、どう生きて行くか、それらの日々私は心底苦悩した。馬齢すでに八十歳を過ぎ、これから後は家族の中にあつて静かに余生を送らせて頂きたい、という趣旨の知友にあてた父の挨拶状をみると、父は夢をみていたのだと思う。家庭の相貌を直視するのが恐ろしく、夢をみようとしていたのだと思う。夢をみて、それに縋^{すが}ろうとした。

その父がガンに冒され、すでに末期であることが判明したのはそれからすぐである。

病中、いろいろな人が宗教を父にすすめた。母は父が宗教に入り、信仰心を持つて死ぬことを拒絶し、あまり人を寄せつけなかったけれども、それでも遙か昔の学友や若い頃の会社の同僚など、これら玄関払いのできない方々が父を見舞い、それを信じると病気が癒

る等、仰有つてくださるのであつた

だが父はどの勧めにもうんといわない。

亡くなったとき、枕の下から震えに震える字でメモ用紙に書かれた、やつと判読できた一首の歌が出て来た。

なむあみだ仏　なむあみだ仏の　おろく
字は　父にも　母にも　縋^{すが}りたまえる
六字にあらずや

これを見て、勧誘されるいろいろな宗教にうんといわなかったわけが、私ははじめてわかつた気がした。

死をみつめる中で、父の心に甦^さつて来たのは、幼い頃から目にしたその両親や祖父母の、念仏称名に生きる姿であつたのだ。

母がせせら笑い、気まずい空気がますます濃くなるのを恐れて、父は後半生、故郷や故郷の人々のことを殆ど口にしなくなった。だが、枕の下から出て来た右の歌をはじめメモ

の断片を読んだ利は、どんなにか父は死を前にして故郷をなつかしんだことかと思う。

罰当りの家族であつた私たちは、父を無視し、粗末に扱うことにあまりにも慣れていた。病中、父はふと私に、「父さん一人が我慢すれば家がうまくいくと思つていた——」と呟いたことがあつたが、父は自分が愛され、穏やかに、大切に扱われた故郷での日々のことを有難い尊い思い出としてなつかしんだにちがいない。その尊い思い出に支えられ、その後の人生を生き抜くことが出来たのだ。

父は今、幼少時代を慈しみ育ててくれた祖父のもとに戻り、その地で眠っている。その墓は父が晩年に建て直したもので、その一隅に父は「謝恩」の二字を刻んだ。

この父を通して、私の目には今、お念仏に縋り、お念仏に生きた祖父、曾祖父、そして祖先の人々の姿が浮かんで来る。

そしてこれは私の祖先だけでなく、法然さまが浄土の法門を広く民衆に開き教えられて八百年、日本のいたるところで、人々は営々とこれに縋り、これに支えられ、これに希望

を託して生きて来たのだ。今、その力を使う。父の葬儀の日は、朝から秋の雨がしとしとと降る日であつた。もう会社を退いて何年かになつていたが、千数百人の方々が父との最後の別れを惜しんでくださった。

「お人柄ですからね。みなが従つていくのです」と、或る日父について言つてくださった方がある。「曲がつたことを嫌い、筋を通そうとする方でした。とてもお優しくなつたけれど、人が放り投げてしまうことでも、最後まで頑張る方でした。大へん強い方でもあつたことをご存じですか」というお手紙を、私は父の死後或る方から頂いた。

父はほんとうに素晴らしい人間であつたと思う。温かく、思いやり深く、繊細で、そして深い魂の人であつた。強い心を持っていた。今、私はそんな父の生涯をかえり見、そう父を育ててくれた故郷の山河と、慎ましく信仰深く生きた父祖の霊と、彼らをそのように育ててくれた浄土の法門に、心からの感謝をお捧げしたい。

特別寄稿

念仏の数遍について

大正大学教授
厚木・西福寺住職

宮澤正順

一 念仏為先

念仏為先——念仏を（もつて）先となす

——ということばは、念仏為本という語と一緒に議論されることが多い。先と本とは、意味内容上、共通するところもあるが、字が違っているように、内容にも異なるところがある。本は末と対立し、先は後を意識する。しかしながら儒教では、本末・内外・先後を一体として考えている。『大学』という書物に、

物に本末あり、事に終始あり、先後するところを知れば、即ち、道に近し。

と記されている。朱子は、

本と始は先とするところ、末と終わりは後とするところなり。

と註釈を加えている。結局のところ、本と先とは、共通する概念で扱われている。念仏の元祖法然上人も、時に

往生の業は、念をもつて本となす。（十七
条御法語）

とか、

念仏をもつて往生の本願となす。（選択
集）

とも言われている。元祖様以前では、恵心僧都も、『往生要集』では、

往生の業は、念仏を本となす。

とし、『妙行業記』では、本の一字を先に改めている（『聖光上人伝説の詞』）。唐の法琳の『弁正論』には、「始を本となす」とあり、道教の典籍である『道教義枢』では、「本は始めなり、根なり」としている。同じく道教では、「道は清浄をもつて本となし、徳は陰陽をもつて先となす」（『靈剣子』）ともいう。本と先とは、ほとんど区別できない。しかしあくまでも、本は根本を意味し、先は前後先後の先である。

元祖様は、聖道門と浄土門との対立を煽る考えなど毛頭持っておられなかった。元祖様は、

理観、菩提心、読誦大乘、真言、止観等

はいずれも仏法の、おろかにましますにはあらず、みな生死済度の法なれども、末代になりぬれば、力およばず、行人の不法なるによりて機はおよばぬなり。

〔十二問答〕

とも、

聖道門の修行は、智慧を極めて生死を離れ、浄土門の修行は愚癡に還りて極楽に生まる。〔禪勝房に示されける御詞〕ともいわれている。法然上人は、透徹した人間觀に立脚して、凡夫のために浄土門を選択されたのである。されば、念仏為先がふさわしい。

法然上人の教を受けた人々の中から、念仏の数遍を問題にする人々が現われた。一遍念仏を称えればよいとする一念義と数多くの念仏を勧める多念義の立場の違いである。どちらの側も、元祖様のお心を自分たちこそ正しく受け止めていると考えていた。お互いが元祖様の教えに基づくと信じていた両派の論争を静めるのには、善導大師のお力によらなけ

ればならなかった、といわれている。このことはいずれにしても、両者が法然上人の念仏を数遍において理解することが正しい、と信じていたことを示している。しかし、念仏の数量遍数だけを言挙げすることほど、元祖様の心を悩ませたことはなかったであろう。そのような議論をしているゆとりがあったのなら、まず先に、お念仏を称えなさい、と元祖様はおっしゃりたかったに違いない。元祖様においては「先、念仏ありき」であった。こう考えるのが至当ではなからうか。わが浄土宗が、常に「念仏為先」を宗門の旗印に掲げてきたことは、正しい。故に法然上人は、

一念十念にて往生す、といえはとて、念仏疎相に申せば、信が行を妨ぐなり。念念不捨といえはとて、一念十念を不定と思えば、行が信を妨ぐなり。かかるが故に、信をば一念に生まるととりて、行をば一形に励むべし。

〔禪勝房に示す御詞〕

と説かれるのである。

二 急ぎ急ぎ名号を称すべし

元祖様のおことばに、

末法の中には、持戒もなく破戒もなし。

ただ、名字の比丘のみありと、伝教大師の末法灯明記に書き給えるうえは、なにと持戒破戒の沙汰はすべきぞ。

かかるひらの凡夫のためにおこし給える本願なればとて、急ぎ急ぎ名号を称すべし。

(十二問答)

とある。民間の咒語の「唵唵如律令」と対比できるおことばである。仏陀の遺された尊い戒律ではあるが、凡夫の多い末世においては、それを遵守する人よりも遵守できない人の方が圧倒的に多い。末法の世においては、あれが良いこれが悪い、という議論ではなくて、両者を止揚して、今すぐ、急ぎ急ぎ、念仏を称えることに徹せよ、と諭されるのである。

念仏者が、阿弥陀如来のお救いを頂けるこ

とには、何の疑点もない。そのことは、元祖様のおことばと生涯とで証明されている。仏教の中心思想である地獄への輪廻の絆をば、弥陀の本願を信じて称える念仏が断ち切つて下さる。地獄への輪廻を信じない人は、今しばらく論外に置こう。この世は苦である、と説かれた釈尊のおことばのように、人々は、日々苦しく厳しい人生を送っている。中国の有名な思想家である莊子も、

病瘦・死喪・憂患（病氣と喪式と悩み事）

を除きて、其の中に口を開いて笑うこと、一月の中、四五日に過ぎざるのみ。

(盜跖第二十九)

と述べている。四五日とは、短い時間を示す表現に過ぎない。莊子はそこで、

大塊は、我を載するに形をもつてし、我を勞さすに生をもつてし、我を佚むるに老をもつてし、我を息わするに死をもつてす。

(大宗師第八)

と、死こそ人間のための休息である、と説く。

輪廻転生の思想を持っていなかった中国人の、現実的な人生観といえよう。

しかしながら、輪廻を信する仏教者においては、莊子流に死を把握する訳にはいかない。法然上人も、

ある文には、一人一日中、八億四千念、念々の中の所作、みなこれ三途の業といえり。

〔十二箇条の問答〕と記し遺されている。凡夫の言動はみな、地獄への道につながっている。

莊子の思想でも明らかのように、中国人は本来、因縁や輪廻のことは信じていなかった。莊子や老子の思想を取り入れて生まれた中国人の宗教である道教においても、死後転生の考えは、稀薄であった。儒教においては、一層極端であって、梁の皇侃は、『論語義疏』の中で、孔子の「未知生、焉知死」〔先進第十二〕という言葉を解釈して、

周孔の教えは、ただ現在のみを説きて、過去と未来とを明らかにせず。

と記している。道教と仏教とを比較して、そ

れぞれの特色を示すことばの中に、次のような表現があるのも参考になるであろう。

仏（教）は、因縁をもって宗となし、道（教）は、自然をもって義となす。

〔笑道論〕
道門（道教）は、仙と成れども輪廻を出でず。

かの曇鸞大師も、道教の仙方（仙人の教法）を学んで得意になって、菩提流支に対して、質問した。仏教には、長生不死の法があるのか、と。菩提流支はそのことばを聞くと、地に唾をはき捨てて、いい放った。

すなわち、
此の（仙）方の何くの処にか長生不死の法あらんや。たとえ長き年を得て、少しの時は死せざれども、終に更に、三有を輪廻するのみ。（『統高僧伝』『釈氏源流』）
といって、『観無量寿（仏）経』を与えた。更に、これこそが大いなる仙方であるから、よく修行して、生死を解脱せよ、と勧めたこと

はよく知られている。道教は不老不死を説くけれど、無老無死ではないのである。人間誰れしも、現実の苦しみを生き抜いた揚句に、更に苦しい地獄行きなど望む人はいない。しかしながら、文明の進んだ今日、地獄に落ちるぞとか祟りがあるぞとか、しきりに説かれている。ありがたいことに、念仏者には、地獄も魔界も祟りもないことは、やはり、八十歳の生涯を終えられた法然上人が明らかにされている。

往生疑いなし、と深く思い入れて、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と申せば、善人も悪人も、男子も女子も、十人は十人ながら百人は百人ながら、みな往生を遂ぐるなり。

（念仏往生要義抄）

たとい無間の重罪なりということも、称名の功德にはかつべからず。

利剣即^{きんけん}是^ぜ弥陀^{みだつ}号^{ごう}。たもてば魔縁^{まごん}ちかずか

ず。

一声^{しつ}称^{しょう}念^{ねん}罪^{ざい}皆^{みな}除^ぞ。称^{しょう}えは罪業^{ざいごふ}のこりなし。

（平重衡の問いに念仏往生を示す御詞）

三 一念十念・十声一声・百万遍

法然上人は、

罪ふかければとて卑下し給うべからず。

十悪五逆も廻心すれば往生し、一念十念も心をいたせば来迎す。

（平重衡の問いに念仏往生を示す御詞）

もしは七日一日十声^{じふしつ}一声^{いっしつ}にても、多くも少くも、称名念仏の人は決定して往生す、

と信じて、ないし一念も疑うことなきを深心とは申すなり。

（大胡の太郎実秀へつかわす御返事）

といわれた。中国思想においては、数字は深くかつ重い意味を有している。写経の場合、

一行を十七字と、一般的にはあるがしているのは、「十七条御法語」や聖徳太子の「十七

条憲法」が十七であるのと同様に、重大な意味がその十七の数に含まれているからである。

十七は、宇宙の根源である太極から分かれた五行と四象と八卦の合計である。四象は、

太陽・少陽・太陰・少陰とか四真とかを指す。
（『玉冊』『洞仙經』）従つて十七は、宇宙の精神
元氣が凝結した数なのである。（3）

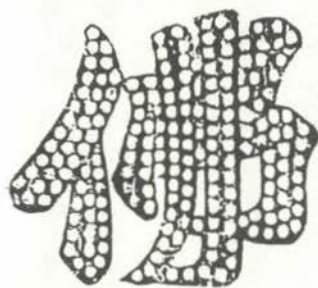
では一と十とは、どのように解釈されているのであろうか。一は、最も簡單にして最も複雑なもので、一はまだ、始めにして全てを含むものである。十は、精美無欠にして、周りにまた始まる数である。つまり、「一はもつて万を合す」（『淮南子』主術）のものであり、『大神・天地の根・人の本命となる』（『黃庭外景經』）ものである。十は、「是れ数の至り。故に人は、十月にして生まる。」（『太極真人……要訣』）とか「尽数の極称」（『度人經』）といわれる。或はまた、「天地陰陽水火土金水是九、人を与えて十たれば、天数おわる。」（『春秋繁露』）とか「一は数の始なり。天の数もまた十に終わり、地の数もまた十に終わり、人の数もまた十に終わる。」（『太平經』）などと解釈されている。なお十は、卅と關係しているが、今は触れないでおく。十念と十声とが、直ちに結びつけられない面もあるし、『無量壽經』

に「乃至十念せんに、若し生ぜずんば正覺をとらじ。」とある乃至についても問題があるので、別の機会に論じたい。

一と十が数の総数であることは、以上によつて明らかになつたであらう。しかし同時に、一と十は、数の最小単位であることも確かなことである。念仏は、たとえ一遍でも十遍でもよいから称えることが望ましい。更に多くの数遍が称えられることは、一層喜ばしいことなのであつて、そこに、百万遍の數量信仰が盛んになる根拠がある。唐の迦才の『淨土論』に、

もしよく七日、念仏して百万遍を満たさば、すなわち往生を得るなり。

とある。百万遍念仏は、わが国の多くの地域社会で、今も盛んに行われている。



右の図は、南無阿弥陀仏の一字一字が圈点（○印）で作られている六字のうちの一字であるが、念仏を千返称えたら一つの圈点を墨で黒く塗りつぶしていく。六字の名号の合計千個の圈点全部が塗抹し終えらると、眼前に、南無阿弥陀仏の六字の名号が写し出されて、同時に百万遍の念仏が成就したことになる。先人のすばらしい知恵である。

注

- (1) 伊藤唯心『浄土宗の成立と展開』、三〇三頁。
- (2) 拙論「唵唵如律令について」（『儀礼文化』第二十号）参照。
- (3) 拙論「道教と写経の歴史」（『中外日報』、平成八年一月九日号）参照。
- (4) 呉慧穎『中国数文化』
- (5) 望月信亨『中国浄土教之研究』、一二四頁。

連載

魅せられて映画に
〈私流映画講座VI〉

丸林久信

続

変なひとたち

撮影所こぼれ話

最終回



トリミング

①写真で、焼き付け、または引き伸ばしの際に、原画の不要部分を除いて、構図中の必要な部分だけを焼き付けること。②手をいれて整頓すること。③仕上げ、縁取り。

三村明カメラマン

（昭和十一年の三好栄子さんと三村明カメラマンの結婚写真）

入社したばかりの私に「ためため、そんなにキヨロキヨロしてたんじゃ監督になれないぞ。映画は棒やて」

指を井桁に組んで「のぞいてみる」と言葉かけたひとが三村さん。変なひとだと思ったら、このひと『人情紙風船』『姿三四郎』の名カメラマンだった。井桁の指がフライング代りになる。目から遠くに離したり近づけたりすると、景色や人物の撮りたいところがみえる。たのもしくないのに、三村さんはトリミングについて語ってくれた。映画は棒の中に捉える世界であり、社会であり、人生であり、キミの言葉を棒で語ることなのだ、と始めて会った私に教えてくれたのである。

左
ト全さん——。

バスが来たとみるや松葉杖を小脇に抱えて飛び乗る変なおっちゃん。

「これをついていると、みなさん席を空けてくれますわい」ニコリともしせず言い放つ。まったく見事な根性（こんじやう）をしているひとだった。

『御用聞き物語』（昭和五十七年）のロケ先の靖国神社の社前で、ト全さんのセリフ、例によってふがふがでたまけにアドリブ（即興）のセリフ、しぐさ）ときては、相手役が生真面目（じめい）一方の三好栄子さん、いまにも泣きそう。仕方ないので三好さんに休んで貰い、ト全さんひとりで、きちつとセリフが言えるまで何度でもテストをした。と、さらばとばかりト全さんも意地を張り通すかのようにアドリブ続出、平然たるもの。

「いつまでも待ってますよ。その代り、O・Kはお預けにして、明日もうちど来てもいいですから」と、私。そう言っただけで、「三好さん、どうぞこちらに」と、ト全さん自分から三好さんを定位置に立たせ、今度は



TV映画『娘の結婚』で住職役の釜さんが、「弱った、弱った」の連発。ロケ現場は私の家の近く、浄土宗「慶岸寺」境内である。釜さんが弱ったのも道理、このお寺は菩提寺だから。

大化の改心のカマタリさんとは違って、こちらは飄々洒脱、お人好しで気のいい善良な庶民の役どころを演じたら天下一品の俳優である。

釜さんこと、藤原釜足さん——。とてもじゃないが、ひとすじ縄ではいけない老人。それが崎人ト全さんたるところかもしれない。

台本どおり、淀みなくセリフを言っている。しよう。

『御用聞き物語』の撮影風景。

右から小林桂樹、沢村貞子、そして筆者、丸林久信監督。



突っ走る青春! 小林・メイコのコンビで配達す。

知用聞物

彼女の子

トシュー

中村メイコ

原作 山下与志一
監督 丸林久信

小 林	中 村	河 内	沢 村	中 北	伊 豆	坂 本
桂	メ	桃	貞	千	島	有
樹	イ	子	子	枝	郎	郎
コ	コ	映	宝	(東)	武	隆
画	画					

平九郎の友人夕子
河内桃子

1

東宝写真ニュース

丸林監督(右)の合図で無言と、
使用開始もアベックで撮影

お得意をとった
月賦の洋服の袖を

スクリーンに映写された絵に合わせ
て音楽を入れたり、セリフをとつ
たりする。現在では音楽はテープで
おこなわれている。左下が録音技師。
効果音、音楽の場合はダビング。セ
リフの場合はアフレコという。



たのである。只でさえセリフ覚えの悪い釜さん、本物の住職のみている前ではシドロモドロ。とても仕事にはならない。初めカメラ前に進んでくる芝居を、カメラを背にしてうしろ向きの芝居に変えて、墓地の中を歩いてもらうことにした。セリフはアフレコ、顔も口許も見えない。相当な長セリフだったが、撮影は無事終了。アフレコの時間もびったりだった。あとで、墓地を一緒に歩いた娘役の女優の話では、芝居の時間きっかり、ひたすらお念仏を唱えていたそうである。相手をしていた娘役、笑うに笑えず、台本どおり、ここと思うところどうなすいたり、肩を震わせて泣いたり演技をしたというのである。

「あんな苦しいお仕事したことないわ」と、娘役の彼女が言う、釜さんもまた「いや、私も。このヒト（娘役）がうまく演じてくれるか、ハラハラしてました」

ケロリと言ったのけたものだった。釜さん、こんなヒトでした。

K・M氏（現在も矍鑠として、映画・TVで活躍されている俳優である）の場合――。

これはどちらかと言えば、変なのは私自身かも。

昭和二十二年七月、ビルマから復員、その足で撮影所に戻った。帰り新参の私は、ひたすら、広い撮影所の中を大車輪になって走り廻った。とある日、ステージにかけ戻った私は「助監督さん！」と声をかけられた。

振り向いた私、はっと呼吸を呑みその場に棒立ちとなった。

私の殺した男がそこに立っている。

一瞬、亡霊をみたのである。

ここはビルマの戦場ではない、撮影所だ。私は狼狽うろたえた自分が恥ずかしかった。いま眼の前にいる男、K・M氏は持ち道具のことを相談したくて、私を呼びとめたのだ。

俳優K・M氏と亡霊と私との関係。

昭和二十年（一九四五）初頭、マンダレー

こどうぐ

小道具 装置(セット)の飾りつけの品物。置き道具、出道具、俳優の持ち道具、消えもの(タバコの煙、食べもののように無くなってしまふもの)などを言う。

州エシン周辺の高地は、イラワジ河畔大会戦の主戦場となっていた。連合軍の大攻勢を受け、高地の日本軍は到るところで玉砕、代りに英軍守備隊が陣を布いた。奪られれば奪り返す。互いに奪りつ奪られつゝの死闘は、まさに日露戦争に於ける二百三高地の近代戦の様相を呈していたのだった。パゴダ(仏塔)五二五高地の戦闘もそのひとつである。

わたしたちの部隊、搜索第五十三部隊は五二五高地奪還を命ぜられた。玉砕覚悟の総攻撃八回。死傷者続出。もはや連隊の体を為していなかった。いよいよこれが最後、この世の見納めとところに決めた突撃寸前の夜半。私たちは転進を命ぜられた。

以後総兵力八十名ほどになった連隊は、転戦につぐ転戦を強いられながら、文字通り敵中横断の敗走をつづけて、五月半ば、生命からがらシタン河を渡ることが出来た。あともう少しして泰領に逃げこめると思ったのが甘かった。連隊はクンゼイク部落の守備隊にさ

れた。河沿いの細長い部落である。

部落の前を流れるシタンの濁流に浮き沈みしながら、毎日百体以上の友軍の死体が流されてくるのが見えた。インパール、雲南方面から敗走してきた部隊が、上流の渡河点で敵襲を受けていたのである。「いずれは俺たちも河流れ」と、岸辺に漂っている死体を流れに押し戻してやる。「はやく海に出て、日本に帰れや」と念じながら。そして、ふと、いま押し戻した兵隊の故郷は、町は、村は、家族は? 彼はいったいどんな生活をしていただろうか。人間関係はうまくいっていたのだろうか。(ああ、こんなときにどうして……)と悔みながら、この兵隊に絡んだストーリー(物語)を考え、映画のドラマを組み立てる。多分、私が河流れになるまで、夢は枯野を駆けめぐり、頭の中で映画を撮りつづけるのだろうなどと思ったりした。

さて、私は丘陵の分哨に出された。分哨は私以下四名。ときどき、牛を追う女や子供が



『のり平の三等亭主』撮影風景。カメラは上にある。

分哨の前の道を通っていく。案外、敵の手先だつたりするから油断が出来ない。

「班長、敵襲だッ！」松元上等兵の叫び声があった。敵ゲリラが喚声をあげて突撃してきた。怖わっ！ 私たちは無我夢中で応戦した。銃声を聞いて中隊から応援が駆けあがってきた。小半刻、銃撃戦。

突然、敵に動きがみえた。撤回したので。

これでひと安心と思つたのも束の間、私は異様な殺気を感じた。危うく避けた私の頬をかすめて、ダー（蛮刀）が振り下された。間一髪、身構えた私の銃がゲリラの腹に当たって音をたてたのと同時に、彼はその場に倒れた。だが驚いたことに、男の手が落ちたダーを取ろうともがいていた。私は思いきりダーを蹴とばした。男は恨めしげに私を睨みつけていたが……、死んだ。

そのときの、その男の、あの顔がいま眼の前に立っていた。（ゴメンナサイ）K・Mさん。そっくりもそっくり瓜ふたつなのでした。

もちろん、彼にはそんな話は出来なかったが、不思議なことに、K・Mさんとは現在に到るまで親交を結んでいる。ゲリラの男が私を襲わなかったら、いまのK・Mさんとこれほどまでのつきあいを持つこともなかったろう。良きにつけ悪しきにつけ、一期一会、人間の出会いとは不可解とも、持つて生まれたものののか、などとも思うのである。

生涯のわが師、稲垣浩監督のこと——。

大プロデューサーであり製作担当重役であったM・F氏とは馬が合わず、彼にかかると、私の作品は襤褸糞で、いくどとなく干され、挙げ句は契約解除というところまできてしまった。頼みにしていたY監督をはじめ、監督部の先輩たち、触らぬ神に祟りなしとばかりにそつぽを向き、「逆らつても仕方ない。長いものには巻かれろ」と曰つたK監督もいた。そんなとき、私は意外なことを耳にした。稲垣監督が私のことでF氏に掘じこみ、あま

B班

実景とか、ほんのちよつとした場面
で監督が演出しないで、A、B班な
ど別組をたてることがあり、助監督、
技術助手の腕のみせどころでもある。

りの見幕にあわやひと騒動もちあがりそうになつたと言うのである。私はいままで稲垣組の助監督についたこともなく、ただ、『お祭り半次郎』（昭和五十三年）のB班で二、三日ほどお手伝いたけの御縁だったのである。

やがて、紆余曲折あつて、私はTV部の専属になつた。稲垣さんにお別れの挨拶に伺つたところ、

「企画、監修などで僕の名前がお役に立つならフルに使つて下さい。また、困ったことがあつたらいつでも相談にのります。ま、せっかく貴方のお力添えさせて貰いますよ」と仰言つて下さつたのである。殆どのひと

がF氏の顔色を窺つていたとき、私にとって稲垣さんは神様仏様のように思えた。

体制や組織に与せず、ある意味では、かぶいて我が道を往く義侠のひと稲垣監督は、残り少ない活動屋なのであろう。私の亡妻曰く「お弟子さんでもないあなたに、あんなに肝煎りして下さるなんて、有難いけど随分と変

な方だわね」

亡妻の生まれ育つた環境では考えられないことなのである。左様、変といえば変かも知れないが、これもB班のお付き合ひでの一期一会なのかも知れない。そして、私は稲垣さんの限りない思いやりが身に沁み（このひと私の生涯の師）と、ここに決めたのだつた。

（文筆家・元東宝映画監督）

—参考文献—拙著『映画製作ハンドブック』
黎明書房—
写真提供 東宝株式会社

・本誌前号の魅せられて映画にの写真は東宝株式会社から提供されたものでした。

春四月。三月が別れの月ならば、今月は出会いの月。新たなスタートの月です。初々しい気持ちで新しく学校へ入学した方も、また、学び舎から巣立ち、社会へ羽ばたかれた方も、夢と希望を抱き、そしてその中に複雑に不安が同居しつつも、それぞれの場でそれぞれに励んでいることでしょう。そこで今回は人と人との出会いに際してとても大切な意味合いをもつ、挨拶についてお話ししましょう。

あるアンケート調査によれば初対面の人に対する第一印象を決定づける要素は、何といつても相手の態度、そして次に言葉づかいという結果が出ているそうです。なるほど、確かにそうですね。逆に言えば、それぐら

若和尚の

十三 其はいいトットチ

いでしか、判断するほかありません。なにしろ初対面なのですから…。

態度、言葉づかい。この先頭に位置するものはやはり挨拶でしょう。一口に挨拶といっても「こんにちは」「はじめまして」といった簡単なものから、複雑かつ長い挨拶まで色々あり、その時と場所、状況に応じて使い分けなければならぬという、ある意味では厄介なものかもしれません。しかし、これをしつかりしないと、本当の自分というものを相手に理解してもらうことはなかなか難しく、逆に誤解されてしまうことにもなりかねません。

何も、美辞麗句を並べ立てた流暢な挨拶がいいとばかりは言

えませんが、挨拶が出来るか出来なにか、いやするかしないかが自分自身を左右する大きな要因となることは間違いないさうです。

もちろん挨拶は、初対面の時に限ったことではありません。「親しき仲にも礼儀あり」の諺通り、その時その時に適切な挨拶を交わすことによつて、お互いの関係に、より深みが増してくるのではないのでしょうか。

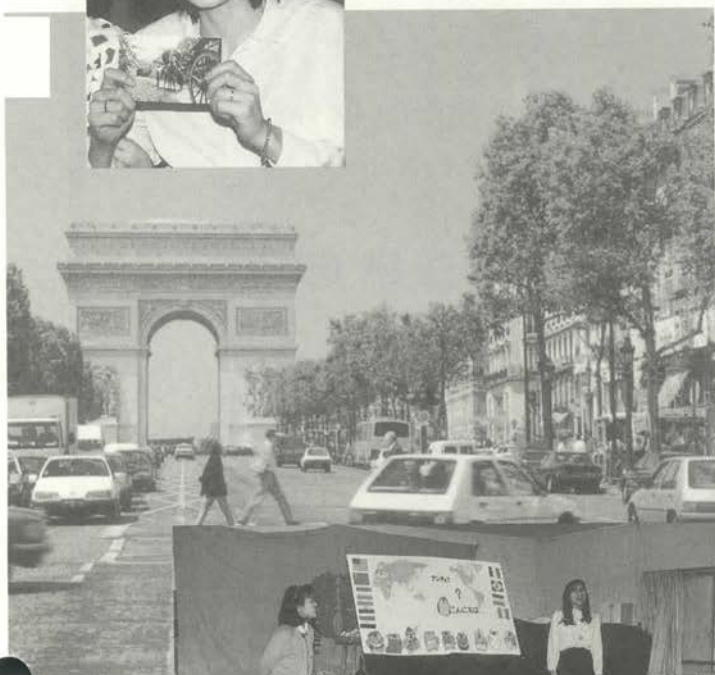
「最近の若い者は挨拶もうろくにできない」。企業や学校の面接担当者からの嘆きの声は年々大きくなってきているようです。自分らしさを、そして真心を伝えられるような、いつもそんな挨拶を心がけたいものです。

(正)

内藤みち



ハンカチのはなし



小さい頃、小学校か幼稚園で「衛生検査」と称して係りのこどもや先生が、

ツメ——は切れているか

ハンカチ——は清潔か

はながみ——を持っているか

なんてケンサしたのを覚えていたのだろうか。

私は「とし君、ツメもうちよつときつてもらおうね」なんて言つてた立場にいたので、子どもたちに人気のある流行のハンカチの柄とこのも知っていた。

机の上に並べられたハンカチとはながみ、自分でも爪がのびていると思つてゐる子は、ちよつと遠慮気味に手を縮めてハンカチのうゑにそつと置く。

ハンカチにもそれぞれ子どもの個性があらわれる。アイロンをかけてあるようなハンカチ、くしゃくしゃにしてポケットに入つていたとすぐわかるもの。きのう買つてもらったばかりのハンカチをもつてきた子は、得意満面でとなりの子に広げて見せたりしている。

「出かける時は、忘れずに！」の合言葉は、子どもにとってカードではなく、ハンカチ、はながみだった。

子どもたちの間では、ハンカチの貸し借りを通じて友情をたしかめあつたりしていた。

わたしは、スイスでも縁あつていろいろな国の子どもがくるインターナショナルの幼稚園で先生をしているのだが、こちらではそんなことに先生がいちいち口出ししない。そのせいか、ハンカチ・ハナガミの両方をポケットにいれている子など、カゼでもひかないかぎり珍しい。

そしてハンカチの貸し借りなんてない。

「忘れちゃったヒトには親切に貸してあげよう」というのが美德とおもつていたが、どうも様子が違ふようだ……。

ある日レストランのトイレで手を洗つてみると鏡の中のご婦人がなにやら手をピラピラ

そのまもらしい）
という結論を得た。

マダムHはおしゃれなヒトだ。口紅の色と服のいろは、必ずあわせる。そんな彼女にブレゼントを贈ることにした。高価なものではなくてよいので、ハンカチにした。日本製の着物柄で、金のもようが入っているちよつと豪華な感じのものだから、おしゃれな彼女もきつと気に入ってくれるにちがいない。

しばらくして、ある日マダムHがなにげなくバッグからそのハンカチをだしてきた。

——ああ、気に入って使ってくれているのならとひそかに喜んだその瞬間、いきなり

「ブ——チンチン」と鼻をかんた。

そして何事もなかったかのようにハンカチをまるめ、バッグにしまった。

こちらのひとが鼻をかむとき、日本人の感覚ではかれば大胆で思いきりがよいとはハナ

シには聞いていたが、駅やバスの中などで、なるほど「ブ——チンチン」と盛大にやっている。そして、よくよく注意してみるとハンカチで鼻をかんでいるひとがけつこっているのだ。

気になってつい目がいってしまう。

ハンカチで鼻をかむのなら、どうりで他人にハンカチを貸さないわけだ。

日本でもちよつと前までハンカチで鼻をかむヒトの姿をみたものだったけれど、最近はそのようなヒトは珍しいのではないだろうか。

ジュネーブの駅前で広告いりのティッシュなんて配っているのはみたことがないからみんなどうしているのだろうか、と思ってデパートをのぞくとちよつと日本とは違うハナガミを売っていた。

「紙ナプキン風はながみ」とでも言いたくなる代物だ。

ちよつと簡単な食事のときに使う紙ナプキ

ンほどの厚さで、まわりにはエンボス加工されているもので、十枚ほどがワンパッケージになっている。よく見ると、

MOUCHOIRS EN PAPIER

とある。

要するに「紙ハンカチ」、イコール「はなごみ」だ。

どうやら若い世代のひとたちは「紙ハンカチ」を使うようだ。

ではハンカチのほうはどうなモノを売っているのだろうか。だいたいデパートは世界中にた感じでモノがならんでいる。

まず正面玄関から入るといゝろんなブランドの化粧品や香水などが華々しくならび、スカーフやアクセサリーなどの売り場が続き財布布なんかがあり、そのわき辺りにハンカチが綺麗にならべられたりしているはずだが……。

同じ階にはなかった。

——やっぱり「プー・チンチン」だからおしゃれもののコーナーには置いてもらえないんだろ

うか——。

ハンカチはワンコーナーを占めるほど「おしゃれ度」の地位は高くないのだろうか。

それでも土産物の店のウィンドウには、スイス刺繍のけっこうな値段のものが堂々と飾つてある。

それに骨董品店には額縁のなかに鎮座しているハンカチもあるわけで、ボビンレースといわれるレースの技術は芸術品といつてよいほどだ。

ヨーロッパの貴婦人がお洒落なハンカチを手にしてすましている肖像画は、だれでもいちどは見たことがあると思う。きっと彼女らもレースの流行の柄に敏感だったにちがいない。その昔、頭文字を刺繍した絹やレースのハンカチを身から離さず持っているのが女性の美德とされていたはずだ。

それに、オペラのなかではムーア人の英雄オテロは、愛妻デズデモナがおとしたハン

国連勤務の夫と猫二匹と一緒に、ジュネーブ郊外に在住。
インターナショナル・ブリスクール（幼稚園）勤務。

数年前から始めたのだが、年賀状を旧正月に出している。

元日の朝、束になっている年賀状を一枚一枚めくるのはなかなか楽しいものだ。

便りのないのは元氣な証拠などと言うが、何年も会えない知人や友人の名前を見ると、たとえ印刷された型通りの賀状でもホッとする。何をしているのか、どんな様子かなどと思いをめぐらすと、次の一枚をめくるのにしばし間があいている。

そして、たぶん同じ頃、つまり元旦の朝にこちらからの年賀状を読んでいるはずだ。

30年以上年賀状を出している方がいる。幼稚園の時の先生で、今はもう郷里の新潟にもどられ

「旧正月の年賀状」

ている。

幼稚園卒業後、小学校、中学校、高校とそれぞれ入学や卒業、あるいは去年はこんな事がありました、と近況をお知らせしてきました。

その近況に合わせて先生が翌年の年賀状に一言添えてくれる。30年続けば短信ながら立派な文通だ。だが残念ながら一年遅れの文通だ。

これが残念だった。なにかリズムが合わなかった。

年賀状は元氣の証、と割り切ればこんな気持ちにはならないのだが、どうもガマンがついにきかなくなった。

一月の正月の年賀状をいただいた方に、二月の旧正月に合せて年賀状を出す。

少々長い一年の近況報告に、いただいた年賀状の文面を参考に一筆加える。それまで一年かかった文通が一カ月になる。そして二月に届く年賀状には先方も結構注目してくれる。

これも「旧正月の年賀状」を出す理由である。

しかし実際は暮れの忙しい中で年賀状を書き忘れる。

年々増え続ける年賀状の返事を遅らせれば少し減るだろう。

という下心も白状しておく。

さてこの一カ月遅れの年賀状の評判は、というと、要は文面の問題のようだが、二月の賀状はインパクトがあるようだ。

何人かから電話をもらい、ご縁がまた生じ出す。

これが何より有り難い。(洋)



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

ＴＶウォッチング、紀行文その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。

誌 上 歌 壇

鑽 仰

蓮門小子（東京）

いまだ風生まれぬ水辺ひとり来てひとり帰るをただ眺めいる

耳朶深く昨日沈めし言葉あり刻みつつ数珠探る指先

一本の樹に寄りかかり融けていくわが身と甘露の別なきしじま

水冠を阿弥陀に載せて友はいま余裕の語感遥かなるかな

わが裡の果てなき散華ひたむきに雪ふることく慄えることく

藹の底鑽仰の淵水青く朝清冽に湧きあがれ名号

※

燭台にあやうく溶けて蠟あれど独居の寺の薄明かりかな

吉野法衣店

各大本山御用達浄土宗袈裟法衣専門



〒160 東京都新宿区南元町17
TEL 03-3355-2168
振替 東京 21176372

誌上俳壇

春めいて森羅万象息吹くさま

啓蟄や地虫の動きしかとみる

黄泉路まで届けと願う雪明り

大寒や老いて務むる子の葬儀

老梅や光をはなつ大伽藍

表紙絵の蒼き山やま春立てり

児玉良男（静岡）

佐藤雅子（山形）

内堀綾子（東京）

一つずつ声かけて雛納めけり

桃太郎のことなど春の吉備路かな

はくれんの百の合掌しづかなり

ふらここの夕空ありて低唱す

吉田ゆきゑ (東京)

児玉仁良

京都一千年の歴史に

育まれた巧みの技

京仏壇・佛具は当店に!!

☎六二五 京都市右京区

西京極南衣手町七四

(株)島津法衣佛具店

☎〇七五—三一四—七七六八

FAX 〇七五—三一五—三七五三

仏教ルネッサンス、再び
珠玉の一冊此処に復刻成る

完全復刻

『浄土』昭和十一年十一月號特輯

念佛讀本

念仏者必携の書！

執筆
—
覧

江藤	島野	笹本	石井	眞野	大野	佐藤	中村	椎尾
激英	禎祥	戒淨	教道	正順	法道	賢順	辨康	辨匡
	中野	松浦	梅原	矢吹	井川	稲垣	小西	佐藤
	英善	一	眞隆	慶輝	定慶	眞我	存祐	春夫

(目次登場順)

平成8年4月、
堂々の刊行成る！

【特別頒価 二千円—送料込み—】

■申し込み・問い合わせ■

法然上人鑽仰会

〒105 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内

電話：03-3578-6947／FAX：03-3578-7036

●J・FORUM（浄土フォーラム）

「ご好評を頂いております、皆様のためのコーナー（J・FORUM）」。毎月、投句、投稿を頂いておりますが、編集部ではもともとたくさんの方の作品を、お待ちしております。短歌や俳句、書評随筆や詩、身近な出来事や情報など、先の要領でほとんどご応募ください。私たち編集部では、読書の皆さんと一緒に、この「浄土」をより楽しく、すばらしいものにしていきたいと考えております。

―随筆・歌など…四百字詰め原稿用紙十枚以内
2俳句・短歌・川柳など…二首まで
3その他、本誌の体裁や掲載記事に対するご意見やご感想など、何なりと気軽にお聞かせ下さい。

…適宜

タイトルは自由です。投稿は随時受け付けておりますが、採否に関しては編集部にご一任下さい。また、原稿は返却いたしませんので必ずコピーをおとりの上お送り下さい。採用分については記念品を進呈いたします。

●読者アンケートのお願い

編集部では「浄土」のより一層の充実を図るために、皆様にアンケートをお願いしております。一四月号でもっともよかった記事。

2今後、掲載してもらいたい記事、希望する内容、3法然上人讃仰会の活動として望むこと。

4その他。ご意見、ご感想など。官製はがきまたはFAXで事務局までお送り下さい。もれなく記念品を差し上げます。どうぞご協力お願いします。（住所、氏名、電話番号をお忘れなく）

●新規会員募集のお知らせ

当会では随時新規会員を募集しています。檀信徒、お知り合いの方々にも本誌のご購読をお勧め下さい。年会費は六千円です。また、ご寺院の皆様方にはなるべく一般会員へのご入会をお願いさせて頂いております（年会費三万円）。一般会員の方には本誌を毎号五部お送りしています。

また、お友達への贈りものにされてみてはいかがでしょうか。ご贈呈先の二住所、お名前をお知

らせて下さい。あなたからのプレゼントであること
をお伝えして発送させて頂きます。きつとあなた
のあたにかいまころが伝わるでしょう。

●新規会員登録紹介（敬称略、願不同）

〈購読会員〉

- | | | |
|------|-----|------|
| *茨城 | 水戸市 | 茅野秀夫 |
| *神奈川 | 川崎市 | 山下茂幸 |
| *埼玉 | 越谷市 | 橋本春江 |
| *滋賀 | 愛知郡 | 西福寺 |
| *東京 | 北区 | 三上哲也 |

〈お詫びと訂正〉

三月号で新規会員登録で京都市北区藤野金二郎は、
藤田金二郎の誤りでした、訂正しお詫び致します。

●バックナンバーのご案内

一昨年四月号以降のバックナンバーがございま
す。ご希望の方、また掲載内容をお知りになりた
い方お問い合わせ下さい。なお、一九九四年二、

五、十一月号は残部僅少につき、お分けすること
ができませんので、あらかじめご了承下さい。

●おわびとお願ひ

実務上の都合により、送付、配本が多少遅れが
ちになり、誠に申し訳ございません。何卒ご理解
頂きますようお願い致します。

また、本誌は万全を期して発送致しております
が、万一不足、乱丁、落丁などがございましたら
お手数ですが事務局までお送り下さいますようお
願ひ致します。

アンケート、お問い合わせ、投稿は……

法然上人鑽仰会

〒一〇五 東京都港区芝公園四一七一四

明照会館内

TEL 〇三―三五七八―六九四七

FAX 〇三―三五七八―七〇三六

編集



後記

釈迦牟尼もかわゆく見える花御堂 岱潤

御存じのとおり八日は、仏祖釈迦牟尼の御降誕の日とされ、その前日七日は宗祖法然上人のお誕生の日である。八日前後の土曜や日曜には、全国の数多くのお寺で花まつりの子供会が開かれ、その日はやはり本堂も子供の声でいっぱいになり、お寺が活気づくとてもいい一日である。お釈迦様もこの日は誕生のお姿で奉られ、子供たちに容赦なく甘茶をかぶせられる。こうした御降誕のお祝は他の国では余り見られない。韓国ではちょうどマンマでは僧侶に布施を積む信者の姿ばかりが目につく。釈尊が子供達と親しくなれる日本の仏教行事をこれからも大切にしたい。

さて、今回新生『浄土』スタート以来、初めて当会の会長でもある牧田諦亮先生に執筆頂いた。八十歳を過ぎてもますます論文執筆に追われ、学究に余念のないところをお書き頂いたものである。また、石丸品子先生が今回、相当な覚悟と勇気を持って執筆頂いたこと、その文面から強く感じられた。大変ありがたく感謝の念に絶えない。『信仰心』という心の内面の問題を表現し、伝えたい小誌にとって、願ってもない真実の心の原稿だと思った。そして吐露したくない事実までお書き頂いたことは、人間を見つめることの厳しさを改めて教えて戴いた気がする。先生の勇気に拍手を送り、我々自身の心に巣くう鬼を確認しながら、表現する勇気を考えてゆきたい。人間讃歌だけでは真実は見えてこないから。

(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

村田洋一

太田正孝

石上俊教

オフィス副代表 佐山哲郎

編集協力

編集顧問

大室了皓

浄土

六十二巻四月号 価額六百元
年間費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
印刷—平成八年二月二十五日
発行—平成八年三月一日

編集人

宮林昭彦

発行人

牧田諦亮

印刷所

株式会社 平文社

写真植字

株式会社 シーティーイー

〒115 東京都港区芝公園四丁目四 四明照会館内

発行所 法然上人鑑仰会

電話 〇三三三五六八六九四七

FAX 〇三三三五六八七〇三六

LIFE TOGETHER
NISSAN

人間のやさしさをクルマに。



使えるよなあ、こいつ。



こんどのパルサーは、 たのしい新実用主義。

- いろんな機能性、30コヒがあるのが新しいのだ、それが
こんどのパルサーのたのしい新実用主義。しっかり楽し
み、しっかり仕事する。しっかり生活する。Mr.しっかりのこれからを、
気持ちよくサポートします。

これ安心

●運転席SRSエアバッグ
システム全車標準装備。



走る走る

- 特選「マルチリンクビームサスペンション」(2way)
- うれしい低燃費 1500X1 (5速フロアシフト) 18.2km/l、1500REZ ZOアライマール (5速フロアシフト) 19.8km/l、18-15オート燃費 20.0km/l (WLTC)

らくちん

- 全装備のある、しなやかな乗りこころ。
- ゆったり室内スペース。

ツイてる

- 新型エアコン
- トランク、ポケット等、収納性◎

パルサー4ドアセダン 1500CJ-1 (5速フロアシフト) **131.3万円**

パルサー4ドアセダン 1500X1 (5速フロアシフト) **148.4万円**

上記価格はいずれも全国メーカー希望小売価格 (税別、北海道・沖縄)

Mr. しっかり 新パルサー誕生

【Mr.しっかり】日常ワダン活用。①新パルサーの別名。②新パルサーに乗る人の愛称。
③一状態……新パルサーでたのしい人生を送っている様子。

●PHOTO：パルサー4ドアセダン1500X1。ボディカラーはブルーインフィニティパールメタリック。エコーアップパッケージはメーカーオプション。●希望小売価格はあくまで目安。標準工賃付。車検代は1.7万円となります。●保険料、税金(消費税と3.5%登録税)は別途費用は別途申し受けます。●希望小売価格は参考価格です。価格は販売店が独自に定めておりますのでそれぞれの販売店にお問い合わせください。●日産自動車 お客様相談室 (全国共通フリーダイヤル) 0120-315-232 ●お車は、お近くのニッサン・ディーラー、ディーラー、日産ディーラー各店にお越しください。



みんな、自分の星を追いかけている。

駆けぬける 喉ごし。

息もつかせぬ爽快感。おいしいビールは、
喉をまっすぐに走ります。胸に一本の滝をつくります。
やすらぎと勇気をあたえてくれるもの。あなたの金星、黒ラベル。

サッポロ〈生〉黒ラベル

ビールは、20歳になってから。あきかんはリサイクルへ ①



サッポロビール株式会社